

2017年9月10日(日)

説教:「勇者よ」

聖書:士師記6:11~24

伊波普猷の論文「琉球民族の精神分析」(1924年)がある。フロイトから学び、琉球人の心的傷害(PTSD)を記す。伊波は、琉球民族は元々大和民族と一支族であると見る。これは民俗学者柳田国男も同じ。南から北上して来た一支族であったと。ただ柳田は、北上する中で挫折した人々が島に残り琉球人となったと説く。対して伊波は、南から北上して来た民族が食物の豊かな土地、瑞穂の国に定住するも、そこから逃げざるを得なかった人々、不自由な孤島に逃げざるを得なかった者たち。その人々によって琉球はつくられて行ったと説く。

おもろそうしの中にそのような歌がある。「むかしはじめからのふし」の結末に、「あまみやすぢやなすな、しねりやすぢやなすな、しやればすぢやなしよわれ。」これは、…そこには天つ神を造らずして、国つ神を造れ、これを近代的に言い表すと、本国を離れて植民せよ、ということになるという。

豊かな国を追われ、島伝いに南島におちのびて、いわゆる孤島の苦悩に生きざるを得なかった人々が琉球の人々…。そこに最初の心的傷害を見る。そして歴史的に薩摩・島津の「琉球侵攻」(1609)、「琉球処分」(1879)を受け、戦争と抑圧を受け続ける琉球の人々は心的傷害を受け続けているのだと分析する。伊波はこの史実をしっかりと分析し、琉球人の生きる道を示して行こうとしている。

さて、イスラエルの民もまた心的傷害を抱えた民であると言えよう。士師記に登場するギデオンは、収穫した小麦をミディアン人に見つからないように酒ぶねの中で小麦を打っていた。抑圧に苦しめられている状況がそこにある。隠れなければ奪われてしまう状況がどんなにみじめで、苦しいことか。そのギデオンに対し、主は「勇者よ」と呼ぶ。ギデオンは、この「勇者」という言葉に向き合おうとはしない。主が「勇者よ」と呼ぶのはどういうことか？

「勇者よ」とは、主なる神が共におられるということを言っている。“あなたに”神は共にいますよ「勇者よ」ということ。あなたが置かれている状況は、抑圧の只中であっても、主なる神は、あなたと共にいる、「勇者よ」と。あなたは決して、抑圧の中に居続けていい存在ではない。あなたの人間としての尊厳が奪われていいわけがない。私はあなたと共にいる「勇者よ」と、主なる神は語っておられる。

この言葉は、私たちにも語られている。主が共に居られる者よ、「勇者よ」と。その時、私たちの内から湧き出て来るものは何か。人間としての尊厳が、勇気が湧き出て来るように思わないだろうか。(神谷)